新人はハンサムガール

日野五十鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新人はハンサムガール

【Ｎコード】
Ｎ４６０７Ｌ

【作者名】
日野五十鈴

【あらすじ】
ある日突然入ってきた新人は、少し性格に難アリのハンサムな女の子。その日から、新人教育を任された矢神光太（やがみ・こうた）の平々凡々たる日常は一変して…？　ラブコメ風のドタバタなオフィスライフが今、始まる。
【１２話完結シリーズ第５段！！】

新人はハンサムガール（1）

結論から言わせてもらおう。

新人はハンサムだった。

「今日みんなに集まってもらったのは、新しい仲間を紹介するためだ。今日から事務作業および営業補佐に入ってもらう」

そう言って社長は新人を呼んだ。

「はい、神野（かんの）さん自己紹介」

「はい！　神野優雅（ゆうが）２５歳です。まだまだ至らないところもあると思いますが、ご指導のほど、よろしくお願いします！」

そして新人・神野優雅は深々と頭を下げた。

第２ボタンまで開けたピンクのシャツに、ダークグレーのベスト。中途半端な長さの茶髪は後頭部に纏め、前髪もくくって後ろにとめてある。ニカッと笑う笑顔には、黒ぶち眼鏡がよく似合っていた。

もう一度言わせてもらおう。

新人はハンサムだった。

しかし…と光太(こうた)は思う。なるほど、確かにイケメンに見えなくもない。だがダークグレーのベスト越しに押し出された胸は、チェストというよりバストなんじゃないかなぁ…。

「新人教育は矢神(やがみ)の担当だ。…はい、矢神も自己紹介」

「は、はい！　矢神光太であります。あの、分からないことがあったら遠慮なく、その、どんどん質問して…ください」

急に振られてしどろもどろになってしまった光太の自己紹介に、社長を除くメンバー全員が爆笑した。

「こらこらぁ、あんまり矢神をいじめるな。じゃ次は年長者からいこうか。西條(さいじょう)くん」

スーツをキッチリ着込んだ上背のある男が、迷惑そうに軽く溜め息をついた。

「…西條悟(さとる)、ＩＴ部門営業部部長だ…」

西條は優雅を頭のてっぺんから爪先まで見て、…また軽く溜め息をついた。どうも優雅がお気に召さないらしい。

「はいは～い、じゃ次私ね。吉田綾香(よしだ・あやか)２８歳、神野ちゃんより３つ上ね。営業補佐やってま～す」

優雅よりも年上ながら、縦にも横にも小柄な女子社員が手を振って答えた。

「次俺な。吉川陽介(きっかわ・ようすけ)２５歳。神野ちゃんと同い年なんだけど、神野

ちゃんは彼氏とかいるの？」

「おりません」

「まーじで！？　よしよし、これは2人でどっか行くっきゃないっしょ！」

そして自然なくらいさりげなく優雅の肩に腕をまわす。

「んーでも、俺的には髪とか巻いてスカートはいてた方が好みって感じ？」

「…へぇ…」

優雅は苦く笑っていた。ナンパの次はダメ出しですか。

「吉川。その態度もほどほどにしないと、査定に響くと前に言ったぞ」

「へーい、すいませんでしたぁ。ごめんねー神野ちゃん。前任のなっちゃんはスゲー逸材だったからさー。もっとこう、ゴージャスな感じだったんだ」

「はぁ、ゴージャスですか…」

「小林（こばやし）ぃーお前もそう思うよなぁ？」

「は、じ、自分ですか？　いえ自分はその…神野さんもお綺麗な方だと、その…思いますけど…」

しかし視線はさ迷い、言葉からして棒読み。まるで説得力皆無である。

「ほら、小林もちゃんと挨拶」

「はい！　自分は小林竜哉（たつや）、２２歳です。この春入社したばかりの新入社員ですので、神野さんとは同期のようなものですね。よろしくお願いします！」

「…よし、これで紹介しておくヤツは全員かな。じゃみんな、神野さんの分からないことがあったら丁寧に教えてあげるように」

「はい！」

「へいへ～い」

「分かりました」

「…了解しました」

挨拶とは逆の順番で皆が了承した。

「…よろしくね、神野さん」

最後に光太がそう笑いかけた。

「はい、矢神さん！　ご指導のほど、よろしくお願いします！」

そしてニカッと笑いかける優雅。

（う～ん…男の子だったら絶対にモテそーなのになぁ…）

失礼にも光太はそう思った。

○●○●○

そして、そのとばっちりは意外にも早々に来た。

光太がトイレから出てくると、早速優雅がコピー用紙のどっさり入った箱を、よいしょよいしょと運んでいるところだった。

「か…神野さんっ！　こーゆー仕事は俺か吉川くんか小林がやるから言えよ！」

ひったくるように箱を奪い取る。マズイ。叱るような口調の上に新人の仕事も取ってしまって、優雅は怒ってないだろうか。

「…ふ…ふふふふふ」

「へ？」

怒って…ない？

「優しいんですね、矢神さん」

「いやいやいや力仕事は男がやるもんだろ」

「…これ、お礼です」

「ん？」

優雅は缶コーヒーをポケットから出して、光太の持つ箱の上に置いた。

「お、おう…サンキュー神野さん…」

「…優雅、って呼んでほしいですね。矢神さんには」

「え？　でも…」

それってイロイロまずくないか？

しかし黒ぶち眼鏡ごしに期待した眼差しを向けられ、光太は断るに断れなかった。

「…ゆ…ゆう…」

「ん、ほら、頑張ってください」

「…優雅、ちゃん？」

「はい、よくできました。ではこれはご褒美に」

「わ」

右ポケットから1缶、左ポケットから2缶の缶コーヒーを出し、優雅はそれらを箱の上に置いた。

（そのベストは四〇元ポケットかー！？）

「では矢神さん、よろしくお願いします。私はお茶を淹れてきますので」

そして優雅は後ろ髪を揺らしながらオフィスへと戻っていった。

光太は呆然と立ち尽くし、目線を箱と缶コーヒーに落とした。

「…缶コーヒーの分だけ重くなってるんだよな…」

このコーヒーは感謝の気持ちなのか嫌がらせなのか。

しかも自分のこと名前で呼べ、なんて…。

…ここにきて光太は気付いた。

（なんつー小悪魔だ！！）

しかし、後の祭りであった。

新人はハンサムガール（2）

週末…。

「神野ちゃ～ん今夜空いてる？」

ル○ン三世みたいに間延びした声で、陽介が神野優雅に訊いてきた。

「あ、ハイ空いてます」

陽介は目を丸くした。

「うわ、即答かよ！　金曜の夜だぞ。『今夜は彼氏と会うんで～』とかねぇの？」

「ねぇですよ！　期待外れですみませんでした」

こんな皮肉にも笑顔で返す優雅…小悪魔だ。

「まぁ、それこそ期待していた答えなんだけどな…今夜神野ちゃんの歓迎会をやる予定だからよ」

「あ、そうだったんですかぁ。それは、ありがとうございますー」

「てなわけで矢神ぃ、ちゃんと神野ちゃんともども残業にならないようにしろよー」

「もー分かってるって吉川くん」

（あれ？　吉川さんは矢神さんのこと、呼び捨てなんだ…）

確か与えられてる情報によると、吉川と矢神は同い年だったはずだが。

「…矢神さんは、吉川さんのこと“くん”付けで呼んでるんですかー？」

「ん？　ああ、吉川くんは俺と違って高卒で入社したからな。だから同い年とはいえ先輩なの。だからって同い年で吉川“先輩”ってのもおかしいだろ？　だから“くん”付け」

「…なるほど…」

それからしばらくは、キータッチの音が響いた。

○●○●○

「それでは、神野ちゃんを歓迎してカンパーイ！」

「「「「カンパーイ！！」」」」

「皆様ありがとうございます！」

会はドレスコードこそ要求されないものの、それなりに洒落たレストランで行われた。手っ取り早く言えば、感じのいい店。

そこに紳士淑女に混じって、やんちゃ坊主然とした優雅が入り込んできたのだ。場違いというか何というか…。

優雅が飲み物にばかり手をつけてるのを見て、光太は心配そうに声をかけた。

「優雅？　なんか全然箸が進んでないけど…具合悪いのか？」

「いえ…ちょっとこの店は私みたいな者には分不相応かなー、なんて…ははは…」

すかさず陽介が口を挟む。

「えー？　矢神は神野ちゃんのこと“優雅”って呼んでんのー？」

（しまったー！）

「ねねね、じゃあ俺も“優雅ちゃん”って呼んでいい？」

優雅はニコッと笑った。

「いえ、矢神さん以外には名前で呼ばれたくないです」

完璧すぎる笑顔だが、言ってることは痛烈だ。本当に小悪魔だよ、小悪魔。

陽介は膨れっ面をする。

「なんだよーじゃ、この場に相応しいように改造してやんねーぞ」

「改造！？」

「…私は別に構いませんが…何をなさる気だったのですか？」

「そーだな…よし！　小林、ちょっと神野ちゃん取り押さえて」

「え！？　じ、自分ですか！？」

しかし先輩の命（めい）には逆らえず、竜哉は優雅を椅子ごと羽交い締めにする。

「ちょ、何するんですか小林くんっ！」

「まずは髪をおろす！」

そう言いながら陽介は優雅の、複雑に纏めてある髪を分解し、わしゃわしゃとかき混ぜたあと手櫛で整えた。

「ギャー、髪がー！」

「最後に眼鏡を外して、っと…」

「……」

「……」

「…完璧だ。これで神野ちゃんもゴージャスな女の子に！」

「…もう抵抗する気も失せました…」

しかし陽介によって改造（？）された優雅は、確かにタダの女の子になっていた。

その後は口々に『かわいー』と言われながら、綾香たちに写メを散々撮られるハメになった…。

そして歓迎会は無事お開きとなった（あのあと優雅は髪を化粧室で結い直した）。

先を歩く優雅と光太を見ながら、綾香はほぅっと溜め息をつく。

「いいわねーあれ、仲のいい兄弟みたい。ていうか神野ちゃんって、あの格好だと本当にカッコいいっていうかー」

側で聞いていた陽介はカチーンときていた。…なに？

「…綾香さんは、神野ちゃんみたいのがタイプなんですか」

「なっ、なによいきなり」

「だっていま『カッコいい』って…」

「いや、だからあれはハンサムだなって意味で…ちょっと、どうしたのよ吉川くん！」

ズンズンと歩き始めた陽介を追いかけようとした。

ときだった。

「ひゅ～。彼女、可愛いねぇ」

「オレたちとどっか遊びに行かない？」

あろうことか、ガラの悪い兄ちゃんたちに絡まれてしまった。

まずい…本当にまずい。

「…結構です。私、連れがいますので」

「ツレぇ？　一体どこに」

「え？…あれっ！？」

悪いことは重なるもので、優雅たちはおろか陽介までも人混みに紛れて行方が分からない。

「そんなつれないこと言わないでどっか行こうよ？　なぁ…」

ヤバい。

ヤバいヤバいヤバいヤバいヤバい！

「いやっ！　離して！！」

「威勢のいい女だなっ」

（なにこの人たち…怖い…怖いよ…誰か…）

誰か助けて…！

「綾香さん！！」

と、そこに声が響いた。

……が。

「か、神野ちゃん！？」

「綾香さんから手を離せ！」

「…ひゅ～。もしかしてこの女、僕ちゃんの知り合い？」

「じゃーちょっと借りちゃってもいいよね～」

ゲで始まる下品な笑い声の中を、優雅は物怖じもせず進む。

「神野ちゃん、どうして…」

「綾香さんがなかなか追い付かないから、心配で様子を見に来たんですよ」

「ん？　あれぇ？」

手前にいた男が優雅に近付き、全身ねめまわすようにしてジロジロ見てきた。

「もしかして僕ちゃん、男の子じゃなくて…女？」

「ですが？」

男たちは視線を交わせ合わす。

と、手前の男が馴れ馴れしく優雅の肩に手を乗せた。

「んじゃ、お嬢ちゃんにも同行してもらおっかな～」

「神野ちゃん！　逃げて！！」

ドサッ。

「…え…？」

綾香の目の前で、ひとりの男がいきなり昏倒した。

…なに…？

「んだとテメェ！？」

「よくもやってくれたじゃねーか！！」

「神野ちゃん！　危ない！！」

ドスッ。ガスッ。

緊迫した空気の中、ついにいくつもの鈍い殴打の音が響いた。周囲は優雅の血まみれの姿を想像し、ひっと息を呑む。

「…ぐぅっ…」

「…かはっ…」

しかし次の瞬間、誰もが目を疑った。なんとあっという間に叩きのめされたのは、優雅ではなく男2人の方だったのだ。

見て見ぬふりしていた周囲の者が、一斉にヒソヒソと声に出す。

「なにあれ、空手？」

「違う。少林寺か、合気道じゃね？」

「てか、あの小僧っ子すげぇな。一瞬で男2人倒しちまった…。確実に急所を狙ってったぜ」

（え？　これ、神野ちゃんが？）

途方に暮れていると、ぎゅっと手を握る強い力があった。

「綾香さん！　こっちです！」

「あ、うん！」

そこに同じく様子を見に来た男性陣と合流する。

「2人とも、怪我は」

「ありません。部長、綾香さんを安全なところにお願いします」

「了解した。矢神、お前は神野さん引っ張って別方向に逃げろ」

「はいっ！」

こうして各人、荒くれ者から逃れるために散り散りに逃げていった。

光太は優雅を路地へと引っ張り込む。

「ところで優雅、さっきの何！？」

「え」

「男3人ブッ倒した話だよ！　なんか武道やってたの！？」

「いや…昔から痴漢とか変質者にはよく絡まれていて…そのたびに抵抗してたから、その、…自然に…」

なんてやつだ。

仲間を呼んだらしく、闘鶏のごとき雄叫びを上げて追いかけてくる男たちを振り返り、光太は舌打ちした。

「ちっ、このままじゃ…優雅、どこに逃げ込む！？」

「矢神さんにお任せします！」

そんなこと言われても、と光太は顔を真っ赤にして困り果てた。

だっていま突っ切ってるのはラブホ街だったから！

「…っ、変な噂とかたっても、ホントに後悔しないな！？」

「ここでボコボコにされるよりマシです！」

どのみちこのまま逃げ回っていたらいずれ捕まる。

光太は意を決して優雅をホテルへ連れ込んだ。

新人はハンサムガール（3）

光太は空き状況を確認すると、宿泊としてチェックインした。まさか一晩中見張られることはないだろう。多分。

「…うっわ…」

部屋に入った瞬間、固まった。ピンクの照明とダブルベッドに並んだ2つの枕が生々しい…。

「ええと、どっちに寝ますか？　ベッドとソファーと」

「どっちでもいいよ」

「じゃあ、ベッドを使ってください。私はソファーで寝ますから」

そう言っていそいそと枕をひとつソファーに持っていく。

「…それじゃ悪いよ」

優雅は目を見開いた。

「あのですね…私がどれだけ気が利くかお分かりでなかったのですか？　男の人に脚を曲げて眠らせるようなことは断じてしません！　私は」

「はぁ…」

（一応、男として見てくれてるんだ…）

「だったら、俺がどれだけフェミニストか気付いてなかったのか？　女の子を硬いソファーの上で寝かせるような真似はしません！　俺は」

「じゃあ、2人でベッドインしますか？」

笑顔で問われ、光太の顔に朱がのぼった。

「な、な、なに、言って…」

「それが嫌なら、おとなしくベッドでひとり寝てください」

「……」

小悪魔どころか本物の悪魔を見た気がした。

優雅に先にシャワーを浴びてもらい、光太がシャワールームから出る頃、すでに優雅はソファーですやすやと眠っていた。

（…まったく…怖い目に遭ったばかりだというのに、よく眠れるよ…）

おりた睫毛が長く揃ってなんて憎たらしい、と光太はぼんやり思う。
と、そこで光太は一案思い付き、スーツのポケットからケータイを取り出した。
ゆっくり近づいて…。

パシャッ。

写メＧＥＴ！

（あー…、こうやって見ると顔だけはやたらいーんだよなー…）
やんちゃ坊主なスタイルに惑わされて、普段は全然そう思えないけれど…。
また一案思い付き、光太は掛け布団を引っ張り出して、ソファーごと優雅の体にかけてやる。
そして自分はスーツを体に掛けて、疲れと酔いからぐっすりと眠ったのだった。

○●○●○

……。

……。

……ピピピピピピピピ。

翌朝、光太はケータイのアラームでとろとろと目を覚ました。

…なんだか、妙に温い。そして何かが体に乗っかっていた。不思議と心地いい重さ。

「ん…っ」

光太はアラームを止めようと、夢と現の狭間で体をずらそうとした。が、体がピクリとも動かない。

乗っかってるもの…いや、絡み付いているものが起きさせてくれなかった。光太は夢見心地のまま瞼をおしあける。

ちょっと視線を下げると、間近に整った顔があった。髪をおろした眼鏡ナシの優雅の顔だ。

（…あー、そーいや昨日は優雅とラブホに泊まって…、……）

そこで光太の頭は一気に冷めた。

（ちょ、ちょ、ちょ、ちょっと待てーぃ！？）

光太は優雅と抱き合うような格好で寝ていたのである。跳ね起きようとするも、腕も脚もしっかり絡み付いてびくともしなかった。

「ちょ、ちょっと！　神野さん！起きろ。離せってのっ。神野！！」

「ん…」

優雅はぼうっと目をあけた。そしてとろとろ瞼をおろす。

「…優雅って呼ぶと仰いましたよね…」

そして、寝た。

光太は絶叫した。

「寝るなぁっ！！　起きろ！　起きろってっ。起きろってぇのぉおおおおおッ」

その顛末を聞いて、陽介と竜哉は爆笑した。

週明けの昼休み、馴染みの飯屋には陽介と竜哉、そして光太と優雅がいた。

「笑うな」

「だって…だってあまりにも微笑ましいから…ぶっ、あっはははは！」

「くそっ」

竜哉は後輩ということもあって必死に笑いをこらえていたが、陽介は遠慮なしにゲラゲラ笑い転げた。料理に全く箸をつけていない。

「それで、お二人は付き合うことになったのですか？」

何気ない竜哉の問いに、その場の空気がビシィーッと固まった（気がした）。

「…あれ？　そのまま結ばれたんじゃないんですか？」

「む…！？」

「…え…っと…」

「結ばれてないっ！！」

「そうなんですか？」

「そうだよ。なあ？　優雅」

しかし優雅はふいとあらぬ方向を見た。

…光太は蒼白になった。

「だだだだって、お前早々に眠りこけてたじゃんよ！」

優雅は無言でポリポリと漬け物をかじった。光太の顔色が青から白に変わる。

「た、た、た、単に寝惚けてああなったんだろ！？」

ポリポリポリポリ。

「言い逃れなんて男らしくないな～。ちゃんと責任とれよ」

「だ、だから違っ…！　優雅！！」

光太は隣に座る優雅の肩を掴み、真っ向から見据えた。

「…ちゃんと答えろ。いいな、正直に！　あの日、何もなかったんだよな！？」

優雅は素知らぬ顔で漬け物を咀嚼していたが、ごくんと飲み込むと何とも言えぬ表情になった。まるで笑いをこらえているかのようなビミョーな顔だ。

光太はへなへなと肩から手を離した。

「…何もなかったんだな。あーびっくりした」

その本気でホッとした様子に、優雅はちょっと面白くなくなった。むぅ、と眉を寄せて光太を見る。

「なんですか。何かあっちゃいけないんですか」
「そういう問題じゃないっ。いいか？　そーゆーのはダな、フツー好きな人とやるもんなのッ」
優雅の整った眉が更に寄った。
「…矢神さんは、私のこと嫌いなんですね」
「え！？　ええと、それは…」
悲しそうな表情を向けられて、光太は『嫌いではない』と言えなくなった。やんちゃ坊主モードとはいえ、綺麗な顔の悲哀は常人にも充分武器になる。
「そ、そりゃ好きだよ。だけどその“好き”じゃダメなの！」
「…なんですかそれは」
「つまりだな、好きだけど同僚として大切っていうか、弟みたいで可愛いっていうか、ええと、優雅はそんな感じなの！」
なんつー乙女思考だ…陽介と竜哉は目を覆ったが、優雅は難しい顔で腕を組んだ。
「要するに、愛してる方でないと床（とこ）を共にしないってことですか？」
「そう！！　そうなんだよ！　まったく真っ昼間からこんなこと言わせて…」

ブチブチと愚痴りながらご飯をかきこむ光太を、優雅は目を細めて見つめていた。

新人はハンサムガール（4）

長閑な日中。

その悲鳴は、平穏なオフィス内に唐突に響いた。

「ぎゃあああああ！？」

声の主はコピー中の綾香で、その後ろでは綾香より背の高い女子社員がクスクス笑ってた。

「み、耳に生暖かい風がぁあああ！！」

「ぶっ、くくく。綾香さん、色気のない悲鳴ですね～。私もやる気なくしますよ」

「かっ、神野ちゃん！！　なんのやる気よ何の！」

「失礼」

どうやらコピーに集中していた綾香に、優雅が息をフーッと耳に吹きかけたらしい。子供っぽいというか何というか…。

「吉川さんからコピー頼まれまして。しばらく順番待ちさせてください」

「な、なら仕事進めるか、お茶でも淹れればいいじゃないのよ！」
優雅はニコッと笑った。
「はい。与えられた仕事を片付けて、湯飲みを洗って、皆様のお茶を用意して、もうやることはコピーしかありませんので。綾香さんのお茶もデスクに置いてありますので、冷めないうちにどうぞ」
「……」
遠回しに『コピー早くお願いします』と言われ、綾香は仕方なく早く仕上げたのだった。

外回りから帰ってきた光太は、しばらくデスクワークすることになっていた。
しかし単調なデータ整理で眠くなる。
しかも昼食をとったばかりだから余計に睡魔が…。
「仕事中に居眠りとは、いい度胸だな。矢神」
「ひゃあああああ！　す、すみませんでしたぁあああ！！」
椅子からおりて頭を勢いよく下げたとき。

カシャッ。

「…ん？」

「ぶっ、くくく…矢神さん、西條部長にどれだけ恐怖感抱いてるんですか。小林くんだってそこまでペコペコしませんでしたよ」

そこにはケータイで写メを撮っている優雅の姿があった…。

「な…な…な…」

「あ、シャッターチャンス」

カシャッ。

「やめんかぁあああああッ！！」

「うわ、矢神さんがキレた…こえー」

「おっ、お前は俺にイタズラするために来たのかっ！？」

「まさか」

そして、どこからともなく膨大な資料の山を取り出して、光太のパソコンの脇に置いた。

「西條部長から言付かってきました。いつもの要領でまとめあげて、取引先にデータを送れとのことです。定時までに終われば上々ですが、遅くても今日中には送るようにと。ご質問は？」

笑顔で無理難題をサラリと言われ、光太は舌打ちしてからボソリと言った。前々から思っていたが…。

「…このS新人め」

「はい？　何か仰いましたか？」

「何度でも言ってやるよ！！　このS！　ドS！　サディスト！！」

サディスト呼ばわりされても、優雅は名に恥じない優雅な笑みを浮かべ、『光栄ですね』と言って去っていった。

○●○●○

（おっ、終わらない…）

現在午後１０時過ぎ…誰もいないオフィスで、光太はカタカタとキーを打っていた。

それもこれも、夕方に表計算の高度な設定に躓いたのが運の尽きだった。

普段は外回りが主なため、表計算の特殊な機能など滅多に使わない。そのため難題をクリアするのに孤軍奮闘し、未だに急ぎの仕事も終わらないまま今に至る。

（終わらない…超終わらない…）

光太は無自覚に半べそになっていた。

するとそこに、誰もいなかったオフィスに軽い足音が聞こえる。

「…うわ。まだいたんですか？　矢神さん」

入ってきた人物を見て光太は目を剥いた。

「優雅…？　お前こそなんでこんな時間に？」

「ちょっと忘れ物を。…げ。これ、今日までって部長が言ってたやつじゃないですか！」

「ま、まあな…」

返事も曖昧に光太は一心不乱にキーを叩く。

優雅はニッと笑んだ。

「…日付さえ変わらなければＯＫなんですよね」

「多分な…」

「…分かりました。ちょっと代わりましょう。私なら多分間に合いますから」

「ええ！？　でも…」

悪いから、と言おうとすると、優雅が滅多に見せない厳しい表情になった。

「でもも何もあるか。こういうことの一つ一つが、顧客の信用問題に関わってくるんだ」

「…なぜに西條部長の口真似？」

「それに、長時間パソコンに向かってたら、それこそ疲れで効率悪くなって逆効果ですよ。気にしないで少し休んでてください」

「…いいのか？」

優雅は光太と椅子を交換すると、シャツの袖をまくってキーボードに指を添えた。

「ふっふっふ…１０年間ピアノで鍛え上げた連打をとくと見よ。いざ！」

「いやそれ叩くもんが違うから」
それからしばらくは軽快なキータッチの音だけが響いていた。

……。

「…みさん…矢神さん」

「ん…」

優雅に呼び掛けられ、光太はハッと目を覚ました。ついうっかり船を漕いでいたらしい。

「とりあえず全部終わりました。最終チェックと送信だけお願いします」

「お、おぅ…」

（もう終わったの！？　速くね！？）

しかも間違いがないかチェックしてみると、全くミスは見当たらなかった。時計を確認する。現在午後１１時半。

光太は圧縮したデータを取引先に送信した。…これでよし。

ようやく大仕事が終わると、光太はヘナヘナとデスクに突っ伏した。なんだか疲れがドッと出てきた。

「だいぶお疲れのようですね。生きてますか？」

「…なんとか…。…優雅」

「はい？」

「ありがとな。マジで助かったよ。このお礼はいつか」

優雅はうっすらと微笑した。

「お礼なんて。いつも私がお世話になって…ふぁ～」

「ああ、ゴメン。こんな時間まで付き合わせちまって。明日に響いちまうな」

「べつに私は雑用だけですから問題ないですけど、矢神さんこそ大丈夫ですか？」

「俺はまだ若いから大丈夫だよ」

「なら良かったです。さて…帰ってまた出社というのも面倒ですし…また2人でどこか泊まりますか？」

光太がガバッと跳ね起きた。

「な、な、なに、言って…」

「冗談です。早く帰りましょう」

「そ、そうだな。帰りましょう」

ついつい揃った口調になってしまう。

こうして光太と優雅の慌ただしい夜は終わったのだった。

新人はハンサムガール（5）

（…遅い…）

優雅がまだ会社に来ない。

部長から『神野はちょっと遅れてくるから』と言われているが、すでにもう昼過ぎだ。

（いくらなんでも遅すぎじゃね？まさか、このまま欠勤なんてこと…）

「こんにちはー」

「わ」

思ってた本人が目の前に現れ、光太は仰天した。

が、その指には包帯がぐるぐる巻きにされている。

「優雅！？　どしたのその指！？」

「いや、その…バイクでドジりました…ははは…」

優雅はバイク通勤だった。

「かっ、会社に出てきて大丈夫だったのかよ」

優雅はニッと笑う。

「骨に異常はないですし、大丈夫ですよ。それより矢神さん」

「なに？」

「パソコンの電源入れて頂けませんか。入りそうで入らないですし、力込めるとやっぱり痛いんで」

「ああ…確かにその指だとキーボード押すのも難儀…だよな」

「まったくです。……。…あぁあ！　しまった！！」

優雅が苛立たしげに、髪をガシガシとかきあげた。

「明日の朝までに仕上げなきゃいけない資料があるんだった！　誰か代理を…ってこんなときに部長も綾香さんも小林くんも出てるんだ。参ったなぁ～…」

あれ？　と光太は思った。

（これ、前回の展開に似てる…？）

もしそうなら、恩返しのチャンスだ。

よし！

「あの…優雅？」

「なんですか？」

「俺今日比較的暇だし、その、よければ手伝うよ！」

最後は勢いに任せて言い切ったが、優雅の反応は冷たいものだった。

「…え～…？」

「な、なんだよその不満そうな顔は」

「だって矢神さん、入力メチャクチャ遅いじゃないですか」

「ズゴ」

確かに、入力の遅さは前回見破られていたばかりだった…。

「…でもまあ、この指で打つよりは断然速いでしょうし…お願いできますか？　いや、是非ともお願いします！」

「どっちだよ！　このS新人！」

そんなこんなで、光太は優雅の仕事を残業して手伝うことになったのだった。

カタカタと無機質なキータッチの音が、誰もいないオフィス内にむ

なしく響く。

（あ〜でもこの資料複雑すぎて何が何だか…）

作っている方もよく分からない。というか昨日今日入ったばかりの新人に、よくもまあこんな難しい仕事を任せたものだ。

（まったく社長はどういった経緯（いきさつ）で優雅を雇ったのか…）

「進んでまぁすかー？」

「どぅわぁっ！？」

肩に顎を乗せるような形で後ろからにゅっと覗き込まれ、光太は本気で一瞬肝が冷えた。

「なっ、なんだよ優雅。まだ帰ってなかったの？」

「心外ですね。これは私の仕事ですよ？　手伝ってもらってるのに、私だけ帰るわけにいかないじゃないですか」

「…ああ、そう…」

カチャッ。

「ん？」

「矢神さんはミルク多目がお好きでしたね。…どうぞ。コーヒー淹れてきました」

「あ、ありがと…」

「って、自分が飲みたくなっただけなんですけどね」

そう言ってペロリと舌を出す。おどけた仕種も男前だ。

しかし指を怪我してるのに…。

（わざわざ給湯室で淹れてくれたんだ…）

喉を通る液体が温かい。

ミルクと砂糖がほんのり舌に甘い。

（今まで小悪魔だSだと思ってたけど…意外に天使かも）

「矢神さん、手が止まってますよ。コーヒーで目を覚まして頑張ってください」

（前言撤回！）

やっぱり小悪魔だった。

それからしばらくはマウスでの入力となり…。

「…ありがとうございます。あとは印刷しておしまいです」

「マジでか！？　よっしゃー！」

「あー本当に助かりました。ありがとうございます、光太さん」

「いや、前回は俺のが世話になったし」

あれ？　と光太は首を傾げた。

（ん？　いま“光太”って呼ばれた気が…）

「…さて、後片付けは私がやりますので、光太さんはどうぞお帰りになってください」

「え？　いや、怪我人ひとりに任せておけないよ」

マグカップを片そうとした優雅と同時に、光太の手がマグカップに伸びて優雅の手を包み込む。

2人は同時に手をパッと離した。

「ごっ、ごめん…」

「いえ…大丈夫です」

「……」

「……」

この日、帰るまで2人の間に妙な沈黙が流れた。

○●○●○

週末。

「ただいま戻りましたー」

「あ、お疲れさまでーす」

光太が外回りから帰ると、ぺしっと何かで頭を叩かれた。

「あイテっ！」

「痛いわけないでしょう。たかだかチケット2枚で」

座った上から優雅の声がして振り仰ぐ。

「優雅…お前な…」

「早速ですけど、こないだのお礼です」
渡されたチケットを見てみると。
「映画？」
「ラブストーリーですので、明日彼女さんと見に行ってください」
「いや、俺彼女いねーし」
言うと、優雅はちょっとだけ考え込む仕種を見せた。
「じゃあ、お友達と一緒に見に行ってください」
「男同士でラブストーリーを見ろと言うのかお前は！」
うっかり西條部長や陽介や竜哉と2人きりで、暗い中ラブストーリーを見るシチュエーションを想像してしまった。…さ、寒気が…。
「あ、あの…優雅！」
「はい？」
光太は自分でも分からないうちに言葉にしていた。
「…その…よかったら一緒に行かない…か？」
「…え？」

優雅は眼鏡越しに目を丸くした。

光太は青ざめた。

（あ～俺のバカバカバカ！　それじゃデートになっちまうじゃんよ。俺と優雅はただの同僚なんだし、絶対断られるに決まって…）

「…いいですよ」

「へ？」

「私も明日は暇なんで、光太さんさえよろしければ、是非ご一緒させてください」

「…いいのか？」

「はい。お礼にならないのが残念ですけど」

「いやいや、充分礼にはなってるから」

「ふふ、嬉しいことを言ってくれますね」

こうして翌日、光太と優雅の記念すべき初デートが決まったのだった。

新人はハンサムガール（6）

光太はケータイを取り出して時間を確認した。

（そろそろか…）

最寄りの映画館前で待ち合わせして、もう１０分くらい経つ。思ったより早く着いてしまった。

とりあえず上映中の映画のポスターを眺めていると、後ろから誰かに抱きつかれた。

「こーぅたさんっ♪」

「ギャー！！」

こんなこと（＝イタズラ）をする人間なんて決まってる。

光太は後ろを振り返って文句のひとつでも言おうとしたとき、脳内のＣＰＵがフリーズした。こう、ピシィーッと。

「……。……。……。…え…っと…神野優雅さん…です、よね？」

神野優雅（とおぼしき人）はにっこり笑った。

「私が神野優雅じゃなくて、誰だと仰るんですか？」

「ですよね～。あっはっはっは」

「そですよ～。あっはっはっは」

しかしおろした髪を巻き、黒ぶち眼鏡をはずしてワンピースを着た優雅は、タダの美少女になっていた。メイクもネイルも完璧。というか、ここにきて童顔なのだと再発見。

「やけにめかしこんだなぁ」

光太の本気で感心した様子に、優雅はうろたえた。

「え、ほんと？　めかし込みすぎ？　映画見に行くだけなのにおかしい？　分からないんですよー。男の人と映画なんて行ったことないんですもん」

「いやいや、その…ふ、フツーに可愛いから！」

「…え？」

「…～っ、あー早く行こうぜ。調子狂った…」

「私の方が調子狂いますよ…」

それから暗い映画館の中で、ラブストーリーを鑑賞していた。

○●○●○

「優雅は今日電車なのか？」

映画も終わり、併設のカフェでコーヒーを飲んでると、光太がそう出し抜けに訊いてきた。

「普通こういうときって、映画の感想とか言い合いません？」

最後の方寝てたなんておくびにも出せない。

「って言っても、光太さんは寝てたから知らないでしょうけど」

「なっ、なぜ寝てたと分かる！！…あ、ちょっとごめん」

光太のケータイがマナーモードで震動する。

大学時代の親友のヒロトからだった。

「もしもしヒロト？」

「コータぁ今晩空いてるか？　頼む、空いてるって言ってくれ！」

「どうしたんだよ、急に」

「今夜の合コン、女の子がひとりドタキャンになっちまってさぁ。誰か知り合いの女の子連れてきてもらえねぇ？」

「きゅ、急にそんなこと言われても…」

困って視線をさ迷わせると、目の前にひとり“知り合いの女の子”がいた。

「光太さん？」

「…優雅、今夜空いてる？」

優雅はニコッと笑った。

「予定がある日に、映画なんて来れませんよ」

その言葉を待っていたのだ！

（優雅には生け贄になってもらおう…）

「…ＯＫヒロト。なんとかひとり確保した」

「ホントか！？　わりぃ、スッゲー助かった。この合コンお前も来ていいからな！」

「もしもしヒロト？　ヒロト？…ダメだ、切れちまった」

優雅はまだ頭の中を疑問符で一杯にしている。

「…というわけで、このあと合コンに付き添ってくれ」

「え！？　ご、合コンですか！？」

「これ訊いちゃいけないんだろうけど…彼氏いないんだろ？」

「おりません…」

「セッティングはその道のプロがいるから大丈夫だよ。てなわけで、頼む！」

光太は仏様を拝むような仕種をする。その必死の様子に優雅はニッと笑った。

「…まぁ、賑やかなお食事会とでも思えば…」

「そう！　そうだよ！」

光太は俄然勢いづいた。

「お待たせ～ヒロト」

「コータおせーぞ…っ！？」

「…？　あ、こちら会社の同僚の神野優雅さん。電話もらったときたまたま一緒にいたんだよ」

「お世話になりまーす」

「……」

「ヒロト？…おい、ヒロト！」

ヒロトは光太の襟首を掴むと、有無を言わさぬ力で店の奥に引っ張り込んだ。ヒソヒソ声で話し出す。

「なぁ、神野さんとお前って付き合ってんの？」

「は！？　なんだよイキナリ…」

「だってあんな洒落た格好でひとりの男の前に出てくるかよ」

「そんなんじゃねーよっ。優雅は同僚。そうただの同僚！」

「あのー…？」

後ろで優雅が困り果てたように立ち尽くしている。

「ああ、ごめんな。神野さんはこっちこっち」

というわけで、飲み会スタート。

中心は専ら優雅となった。男性のみならず、女子の評判も上々だった。しかし光太は違和感を覚えていた。

なんというか…見えないベールが優雅を包んでいるような…表面だけは人懐っこいけど、心まで許してないような、そんな気がした。

そう思ってたのは光太だけみたいで、合コンはかなり盛り上がっていたが。

合コンが終わって集計していると、ヒロトが光太の横に陣取った。

「神野ちゃん可愛いな～。オレ、神野ちゃんに本格的にアピっちゃおうかなー」

ヒロトの独り言に、光太は固まった。…なに？

「ヒ…ヒロト、優雅口説こうって、本気？　ていうか、正気？」

「な、なんだよ急に」

光太はガシッとヒロトの肩を掴んだ。

「悪いことは言わねぇ、あんなドSなオトコオンナ、好きになるだけ損だ。ヒロトこの道のプロなんだから、もっと可愛いコ見つかるって」

「…ははぁ～ん」

ヒロトは奇妙な顔をした。何かいけない想像をこねくりまわしている目だ。

「お前も狙ってたのか！」

「なっ…バカな！　俺は友達として忠告を…」

「分かったよ。イケガールは好物だけど、友達の恋路を邪魔する趣味はないから。ま、せいぜい頑張れ」

「は、話聞いてた…？」

「どうしたんですか？　お二人とも」

タイミングよく優雅がやってきて、ヒロトは『せいぜい頑張れよ』と言って立ち去ってしまった。

「光太さん今日はありがとうございました。実りある合コンでしたよー。アド全員分ゲットしてきました！」

「えぇっ！？　いつの間に」

ヒロトもいつの間に。

「光太さんはどうでした？　女性の方と」

「いやまぁそれなりに…あ、でも結局連絡先は訊かなかったな」

「そんなことだろうと思いまして…はい！」

と同時に、光太のケータイの着メロが鳴り出した。

開けてみると優雅からで、アドレスのたくさん書かれたメールが…。

「光太さんのために集めてきました女子メンツ全員のアドです！」

「えぇっ！？　おっ、女の子の分も！？」

「こないだのお礼です。受け取ってください」

「あはははは～…」

（この場合、『ありがとう』でいいのかな…）

そして一行は二次会でカラオケに行くことになった。

先を歩く優雅の背中が、光太にはなんだか少し小さく見えた。

新人はハンサムガール（7）

「あ～、またこれは派手にやられたねぇ優雅」

オフィスにある自分の机の引き出しを開けると、バラバラに切り裂かれた書類がぐちゃぐちゃになって詰め込まれていた。

「ってまぁ、俺も似たようなもんなんだけどさ」

隣にある光太の机の中も同じ惨状である。

「まったく、誰がこんなイタズラを…」

「おい矢神、神野ちゃん。ちょっと来い」

陽介に呼ばれて、2人はデスクに向かった。

「お前ら、オレの机触ったか？」

「い、いいえ」

「俺たちもいま来たばかりだよ」

「…マジかよ！」

とそこに、社長と西條部長、それに綾香と竜哉が入ってきた。

「部長、やられましたよ。狙いは多分G社のデータです」
ひょっこり中を覗き見ると、陽介の引き出しの中も大惨事になっていた。
「鍵まで壊されてる。荒っぽいやり方だな」
「それで、矢神くんと神野さんの机も荒らされてたって訳だ」
「へ？」
社長が穏やかに割って入った。
「吉川くんはいま大きなプロジェクトを抱えていてね。大事な資料は全部極秘の場所にしまってあるんだよ」
「それを知らない誰かが勝手に部屋に入り込んで、【Y・K】印のオレの机を物色したって訳」
デスクにはイニシャルを刻印したテープが貼ってある。
「あ。だから私の引き出し…」
「そう。吉川くんの机を探しても見つからなかった。ならばと同じ【Y・K】の君の机を物色した。が、見つからなかったって寸法だね」
「で、ご丁寧にも【K・Y】の矢神の机まで荒らしたって訳だ」

「…西條くん、すぐにでも資料が無事か確認して。それと警備体勢の強化を」

「はい」

午前中は慌ただしく過ぎていった。

今日は珍しいことに、全員定時で帰れることになった。

「はーぁ。こんなに早く帰れるなんて久しぶりー」

「ちょっと早いが、このあとみんなで飯でも食おうか」

「よっしゃー。部長のおごりッスね」

「吉川、いいかげんその態度を改めろ馬鹿者」

和気藹々とした空気の中会社から出ると、あ、と優雅が声をあげた。

「どうした？」

「すみません、ちょっと忘れ物が…」

部長と陽介はため息をついた。

「エントラスで待ってるから、早く取りに行ってきなさいよ。神野

ちゃん」

綾香の言葉に深く一礼して、優雅は社へと戻ったのだった。

オフィスの前に立つと、カードキーで頑丈な扉を開ける。

電気をつけようとした、その瞬間。

「っ！？」

後ろから誰かに羽交い締めにされた。

「また会ったな僕ちゃん…いや、お嬢ちゃんか」

「あ…っ、あなたは第2話で登場した」

「おや、記憶力がいいな」

なんて言ってる間に、室内が次々と物色される。

「ちょっ、なにするんですか！！　人を呼びますよ！！」

ギラリ。

「え…？」「俺たちが手ぶらで来ると思ってたのかぁ？　大声出してみろ。誰か来る前にこのナイフがあんたの頭にグサリ！　だぜぇ

？」

「……ッ」

「あんときも狙いは、あんたたちの持つカードキーだったんだぜ？まあ掃除のオバチャンから体よく盗めたからよかったけどよ。…さて」

男が耳元で甘く囁く。

「G社のデータのありかを教えてくれよ…なぁ？」

「…そんなもの…」

と、優雅が動いた。

頭突きと急所蹴りを同時にかまし、男を戦闘不能にしたのだ。

「私だって知りません！　誰かー！　ここに不審者がいますー！！」

「うわなんだこの女。声でけぇ」

「優雅！！」

そこにエントラスで待っていたはずの光太たちが駆け寄ってきた。

「ちっ…、逃げるぞ！」

男たちは反対方向へ逃げていった。

「神野、怪我は」

「ありません。それより、あの人たち追いかけないと」

「ダメだ。危険すぎる」

優雅は首を横に振った。

「あの人たち、まだカードキーを持ってます。ヘタしたらまた同じ手口で物色されかねません。黒幕だけでも突き止めないと…行ってきます！」

「お、おい！　神野！」

走り出した優雅を見て、西條部長は光太に指示を出した。

「矢神、神野を追え。私たちは警察に連絡する」

「はいっ！」

○●○●○

相手は車を用意していたらしい。

込み合う車道を、優雅はバイクですり抜けて軽快に走る。
辿り着いたのは、人気（ひとけ）のない小さな公園だった。
「…もしもし、神野です。いまB公園にいます。至急警察に…っぷ！？」
『お、おい神野？　神野！？』
誰かに口を塞がれた…！？
『お、おい神野、切るからな！？』
優雅は相手の手をガブリと噛んだ。
「イテッ！　なんつーじゃじゃ馬だ」
「こっちは命かかってるんですよ！　じゃじゃ馬で結構！！」
あれよあれよという間に、周りには男たちが集まってきた。
優雅はしたなめずりする。
「さあ！　どっからでもかかってきなさい！！」

タクシーであとをつけてきた光太は仰天した。
優雅は踊るようにして次から次へと、襲いかかってくる相手を倒していく。
（すげ…優雅ってこんなに強かったの？）
呆然と見つめていると、背後に誰かの気配を感じた。
腕が強く絡み付いて、身動きがとれない。
（ま、まだ他に仲間がいたのか！？）
「そこまでだ！」
大暴れしていた一団がピタリと止まる。
「光太さん！」
「いいのかい僕ちゃん？　僕ちゃんが暴れると…」
手の空いたひとりが光太の腹に強烈な蹴りを入れた。
「う！…っぐ」
「やめてぇっ！！」
「まったく小僧っ子ひとりに手間かけさせやがって…お前ら、散々に可愛がってやれや！！」

「へいっ！」

男のストレートパンチで、優雅は地面に横倒しになる。

その優雅を男たちは、これでもかと蹴りまくった。

「優雅っ！　俺に構わず抵抗しろ！！」

「うるせぇっ！」

そしてまた腹にパンチが繰り出される。

優雅は無意識に胸と下半身を守りながら、されるがままになっていた。口の端から血がこぼれ、瞼がきつく閉じられている。

そしてどれくらい経ったのだろうか…優雅はピクリとも動かなくなった。

「…うそだろ…！？」

顔中アザだらけの光太が呟いたとき、パトカーのサイレンの音が聞こえた。

（部長たちが呼んでくれたのか…！）

「ちっ…おい、引くぞ！」

「へ、へいっ！」

逃げる男たちを制服警官たちが追いかける。

解き放たれた光太は構わず、倒れこむ優雅に駆け寄った。

「優雅！？　優雅っ！！」

「矢神、怪我は」

「ない。けど優雅が…！」

「…っ、これはひどくやられたな…」

光太は、目の前が真っ暗になった。

新人はハンサムガール（8）

優雅は速やかに病院に搬送され、速やかに処置を施された。

骨や内蔵に異常はなかったが、蹴られた激痛とショックから気を失ってるだけらしい。

顔中ガーゼと絆創膏だらけの光太は、優雅の目が覚めるまで病室で見守ることにした。

「…優雅…」

光太はこんこんと眠っている優雅を見下ろす。

（俺は本当に…最低だ…）

優雅を守るどころか、逆に自分を庇って散々ボコボコにされてしまった。

「…ごめん…本当にごめん…ごめん…」

ただでさえ眼鏡をはずし、髪をおろしている優雅は、否応なく女の子なのだという現実を突きつける。

大切な女ひとり守れないなんて…最低だ。

そこまで思って、光太は目を瞬かせた。

（ん？　“大切な”？）

その思考に頭が真っ白になり顔が火照る。

いやいやいや、大切といってもそれはあくまで同僚として。そう、同僚としてだ。

パンパンと火照った頬を叩くと、その音に反応してか、優雅の瞼が大きく震えた。

「優雅！？」

覆い被さるように見下ろすと、眉間が微かに寄って瞼がおしあけられる。

「気がついたか？　まだどこか痛むか？」

と、優雅の手が光太の頬に伸び、もう片方の手が後頭部を愛しげに撫でた。

「優雅…！？」

「…うぅ…なんで光太さんが私のベッドにいるんですかぁ…？」

そして見事なくらいごく自然に唇が重なりかける。

…まずい…このままじゃ…！

「な・に・ね・ぼ・け・て・ん・だぁあああああ！！」
光太はたまらず優雅のこめかみを拳でグリグリした。
そして地獄を見たような大絶叫が病室に響き渡る。
「神野！？」
「神野ちゃん！？」
「どうした何かあったのか！？」
「神野さん大丈夫ですか！？」
すさまじい悲鳴に、西條部長、綾香、陽介、竜哉が雪崩をうって病室に飛び込んだ。
そこにあったのは、半身を起こして涙目で頭を抱える優雅と、椅子から立ち上がって肩で息をしている光太の姿だった。
どう見ても『動けない女を無理やり襲っている男』の場面である。
「…矢神…お前…」
このとき、光太は完璧に『危険人物』というレッテルを貼られていた。

○●○●○

光太は優雅から隔離（といっても遠くに引き離されただけ）され、陽介と竜哉に見張られることになった。

（さ、最初に手ぇ出してきたのは優雅の方なのに…）

光太は心の中でしくしく泣いた。

「神野、矢神に何されたんだ？」

「…思いっきりグリグリ攻撃されました…」

「…なんでク○ヨンし○ちゃん風？」

まぁとにかく、と西條部長はため息をついた。

「目が覚めたからには、一刻も早く職場に復帰してもらわないとな。この一件で仕事が溜まりに溜まってるから」

「この一件…そうですよ！　G社、G社の件はどうなりました！？」

「解決済みだ」

西條部長は珍しいことに少しだけ笑んだ。

「あのとき捕らえた連中が、Ｊ社の名前を挙げたんだ。Ｊ社は暴力団と手を組み、例のプロジェクトを阻止しようとしていたらしい」

「で、神野ちゃんが相手してたのは、その暴力団だったってわけ」

「そ、そんな物騒な人を私は相手してたんですカ…」

命があるだけでも嘘のような話だ。

横で光太を見張ってた陽介が頭を掻いた。

「でもＪ社はしらばっくれてるって話じゃないッスか」

「まぁでも警察沙汰の騒ぎになったわけだし、Ｊ社もおとなしくしてるだろう。…しかしだ神野」

西條部長はまたあの厳しい眼差しを向けた。

「いくら腕に自信があるからといって、たったひとりで向かうのは少々軽率だぞ」

「…申し訳ありません…」

「少々、と言ったんだ。これから、上に目を付けられずにやってのける無茶の仕方を叩き込んでやるから覚悟しておけ」

光太は目を丸くした。それは、その道のプロからの絶対なる期待。

離れたところで聞いていた竜哉は、ちょっとだけ羨ましそうな顔を

した。

優雅はニッコリと笑うと、躊躇いもなく頭を下げた。

「はい。ご指導よろしくお願い申し上げます！」

上げようとした頭がピクリとも動かない。

上目遣いに視線をやると、西條部長が優雅の頭を撫でていた。

「…よくやった」

西條部長はそのまま髪をわしゃわしゃとかき混ぜた。

新人はハンサムガール（9）

優雅が西條部長に呼び止められたのは、そろそろ昼休みに入ろうかという頃だった。

「14時に矢神のお客様が2名見えるから、応接室にお通ししておいてくれ」

「はい。分かりました」

「…本当に分かってるのか？」

「？」

「まずはだな…」

西條部長はくわっと叫んだ。

「その髪とシャツのボタンをどうにかしろ！　その格好でお客様の前に出る気かお前は！」

「なっ…部長に言われなくても直しますよ！　それにこのスタイルは仕事に集中するためのスイッチです！」

優雅もくわっと叫んだ。あの一件から2人の間には遠慮がない。

西條部長は吐き捨てるように言った。

「まあとにかく、粗相の無いようにな」

それだけ言って去って行く西條部長に、優雅は『お任せください』と背中に投げたのだった。

優雅はシャツのボタンを全てとめ、結っていた前髪を左右に垂らしてヘアピンでとめた。黒ぶち眼鏡も…ダテメガネだったので…外し、半端な長さの後ろ髪は後頭部の半端な位置に結い直した。

そして、光太と客の話はトントン拍子で進んだ。

「…あ、お茶が冷めてしまったようですね。淹れ直しましょう」

「いえ、お構い無く」

「優…神野さん、ちょっと淹れ直してもらえるかな」

「え？」

「神野って…」

「はい。かしこまりました」

優雅は上品な仕種で茶碗を盆の上に乗せる。

「ああそれと、ついでに例の資料も持ってきてもらってもいい？」

「はい。その資料なら、こちらに用意してあります」

「…気が利くねぇ…」

光太の呆れたような呟きを背に、優雅は扉の前に立つ。

「それでは、少々お待ちくださいませ」

そしてパタンと扉が閉められた。

「さて…」

「あのぅ」

「はい？」

「神野さんって、もしかして神野優雅さん？」

「そうですけど…」

へぇ、と客2人は顔を見合わせた。

「あの…神野が何か粗相を？」

「いや、そんなことありません。ずいぶん変わったなぁと思っただけですよ」

「変わった…？」

「実はですね、神野さんは以前わが社で働いてたんですよ」

「え？　そうなんですか？」

「何と言うか…彼女、どこか難しい感じじゃなかったですか」

…聞いてはいけないことだ。

そう思いながらも、光太は客の話を止めることができなかった。

それは多分…優雅の本当の姿を知りたいと思ってしまったから。

「あの人、対人恐怖症気味というか…人とろくに話せない、付き合えないって感じで」

「そ、そうだったんですか？」

「あれ？　もしかして神野さんって、最近入った人ですか？」

「1、2年前じゃなく？」

「はい最近…今年入ったばかりですけど…」

「…そっか…それじゃ人違いかな…」

「彼女が辞めたのは一昨年のことですからね…」

何やらブツブツ言っていると、応接室の扉がノックされた。
新しいお茶を持ってきた優雅が笑顔で立っていた。

○●○●○

それから客は帰り、優雅は湯飲みを洗っていた。
最後のひとつを洗っていると、光太の手が優雅の肩にポンと乗せられる。

「接客ありがとな、優雅」

「いえ…。…あの、光太さん」

「なに？」

「先ほど、私がお茶を淹れ直しているときに、何か話してましたよね」

「！」

…聞かれてた…！？

「…何を、話してらっしゃったのですか？」

光太は大真面目に言い繕うとした。

「……。……。……。…仕事の話の続きを…」

「嘘つかないでください。応接室と給湯室の薄い壁越しに筒抜けでしたよ」

「だっ、だったらなんで訊くんだよ！」

「……」

「……」

それから短い沈黙が流れる。

「…ひとの過去を嗅ぎまわって、楽しいですか？」

「…それは…」

「…人間て、みんなそうなんですね」

優雅は自虐的な笑みを浮かべた。

「他人のアラを探すのが大好きで、それで自分の立場を守って、挙げ句の果てには笑いのネタにして楽しんでるんだ」

「な、なんでそうなるんだよ」

優雅はキッと光太を見上げ、初めて声をあらげて突っ掛かった。

「…もういいです！　いま聞いたことも面白おかしく言いふらせばいいじゃないですか！！」

「俺はそんな…！」

優雅は湯飲みを置くと、ふいとデスクに戻ってしまった。

それから今日一日、2人は一言も言葉を交わさなかった。

新人はハンサムガール（１０）

昨日一日、光太は優雅にメールをすべきか、電話をすべきか、本気で悩んだ。

しかし結局何もできずに、出社時間になってしまった。

「お、おはようございます！」

…返事なしだった。

（つれ？…いつもなら優雅、俺より先に来てるハズ…）

「ああ、矢神」

「あ、部長おはようございます」

「さっき神野から電話があってな、今日は風邪で休むそうだ」

ズキッと、光太の胸に痛みが走った。

（お、俺のせい…？）

「というわけで、今日は神野がいない分キリキリ働くように」

「……」

「返事は」

「…はい…」

罪悪感からか、その声はひどく沈んでいた。

午前中は空っぽの優雅の席をチラチラ見ながらの作業になった。

西條部長たちは外に昼食に出掛けたが、給料日前で懐の寒い光太は近くの店で買ったパンを自分のデスクで食べていた。

「おや。矢神はひとり寂しく昼食かい？」

「あ、社長…」

見ると、社長の手にはコンビニのレジ袋が抱えられている。

「じゃあ、僕も一緒に昼食にしていいかな。先方との打ち合わせのハズだったんだが、ドタキャンされてしまってね」

「ど、どうぞ。いまお茶を淹れてきます」

「ありがとう。悪いね」

それから社長と平社員は、向かい合わせにパンとコンビニ弁当を、

お茶を啜りながら無言で食べるという、とんでもなく奇異な時間を過ごした。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……あの」

「なんだい？」

ややあって、光太が口を開いた。

「その…社長はどうして優…神野さんを採用したんですか？」

語尾が若干震える。社長はコンビニ弁当の上に割り箸を置いた。

「その心は？」

「…神野さんは対人恐怖症だと…聞きました…」

「なるほど。そこまで聞いていたのか」

「それが…本人から直接聞いたわけじゃ、ないんです…」

社長は黙ってお茶をズズッと啜る。

「今日神野さんが来てないのは、その行き違いがあるからかい？」

「…だと…思います…」

「そうか」

「…あの、話は戻りますが、社長はなぜ神野さんを…」

「ああ。対人恐怖症は前向きに克服しようとしているみたいだし、仕事自体はバリバリできるようだから採用した」

「そ、それだけ…？」

なんておおらかな採用なんだ…。

「気になるのかい？」

「え？」

「神野さんだよ」

光太は全身がカーッと熱くなった。少しの間をおいて、光太は正直に告白する。

「…なります」

「ほぅ」

「何と言いますか…危なっかしいというか…放っとけないというか…」

「そうか…。確かに過去を知られては、ちょっと心が不安定だろうからね」

社長の言葉に光太の胸がチクッと痛む。

「部屋には行ったことあるのかい？」

「いえ、そこまでは…」

「そうか…さすがに矢神に名前で呼ばせても、そこまで心は開いてなかったんだね」

「…な、なんで俺…私が神野さんを“優雅”と呼んでるって知ってるんですかっ」

「うん？　さぁ、…なんでだろうね」

すっとぼけながらお茶を啜る社長。すでに弁当は平らげていた。

「…住所を教えてあげよう。ここからそう遠くはないから」

「え？　ですが…」

（そんなことしたら、また優雅怒らしちまうんじゃ…）

「神野さんなら大丈夫だよ。多分、怒りをかうことはない。それに…」

「…それに？」

「彼女はきっと待ってると思うんだ」

「え？」

「誰かが、自分を心配してくれるのを」

「…社長…」

光太はパンの最後の一口を飲み込んだ。

「とにかく一度会って、話をしてきなさい。逃げている神野さんも悪いんだからね」

「…はい…！」

こうして、社長との短い昼休みは過ぎていった。

○●○●○

そろそろ17時になるかというころになって、光太宛に住所の書かれたメールが届いた。

社長からだ。

（……。明日、社長に礼を言わないとな…）

住所を見てみると、なるほど、社長の言うとおり会社から遠くない。

（…今夜にでも会って話をしてこよう）

追い返されるのが関の山だとしても、このままうやむやにはしておけない。

光太はその日、必死に仕事を早く終わらせて定時に会社を出た。

優雅と話をするために。

新人はハンサムガール（１１）

優雅の部屋は、わりとこじんまりしたアパートにあった。

（あ、あんまりキョドってたら、不審者に思われるよな…）

もう夜だし。

光太は扉の前で深呼吸すると、慎重にインターホンを鳴らした。

ピンポーンという音が鳴り響いてしばらく…扉越しに優雅の声が聞こえた。

「はい」

「優雅、俺だ。矢神だ」

扉を隔てて息を呑むのが伝わってくる。

「…な、なんで光太さんがここにいるんデスか…！？」

「…ごめん…社長に教えてもらった…」

「……。…いま開けます」

良かった、と光太は内心ホッとした。

（最悪追い返されると思ってたけど…ん？）

出てきたのは、眼鏡を外して髪をおろした、パジャマ姿の優雅だった。

「なにお前、もう寝てたの？」

「あのですね、私が風邪で休んだこと、ご存知なかったんですか？今日一日ずっと寝てましたから、もうだいぶ良くなりましたけど」

「あれは…お前が会社に出ないための口実だと思ってた…」

「心外ですね。あの程度でキレて出社拒否するほど、私は子供じゃありませんよ」

「はぁ…」

（明日、社長に誤解だったって言っとかないと…）

黙っていると、優雅はニカッと笑った。

「立ち話もなんですし、どうぞお入りください」

「え？　女性の寝間には入れねーよ」

「私が良いと言ってるんですから。風邪うつされる覚悟がおありなら、どうぞ？」

「はぁ…」

光太は促されるまま、部屋の奥に消える優雅のあとを追ったのだった。

○●○●○

優雅の部屋は、本と電子機器で埋め尽くされていた。

ベッド脇には電気スタンドの代わりにノートパソコン、デスクの上に分厚い参考書が数十冊とプリンタ、なんだかよく分からない辞書類が並ぶ本棚の上に電子辞書とデジカメが置いてあり、本棚の飽きスペースには申し訳なさそうにラジカセが置いてある。意外にもセンターテーブルには花瓶にいけられた花が一輪。

ん？　花？

「ああ、ごめん。見舞いに来たのに手ぶらで。花かケーキでも買ってくりゃよかったかな」

「構いませんよ。それより、すみません。気持ち悪い部屋で…」

「？　そうか？　そうは思わないけど…」

優雅は目を丸くした。それから瞬時に丸くしたばかりの目を伏せる。
「…そうですか…。…ここに入った友達は、みんな気持ち悪がってましたけどね…」
（…う。何か俺悪いこと言った気分…）
しかしそう思ってたのは光太だけで、優雅はティーカップを両手に持って笑っていた。
「紅茶でよろしいですか？」
「え？　い、いいよ冷たいので。つーか病人なんだから、そんなお構い無しに」
「私が温かいのを飲みたいんですよ。…紅茶でよろしいですか？」
「あ、ああ。ミルク多目で」
（うわ。俺の馬鹿！）
「…了解。光太さんは紅茶もミルク多目がお好きなんですね。覚えておきます」
優雅は光太をセンターテーブルに座らせると、キッチンへと向かっていった。
と思ったら、いくらもしないうちに戻ってきた。

「お待たせしました。ティーオーレにしましたが、よろしかったですか？」

「さ、サンキュ」

それからしばらくは向かい合わせに座って、ティーオーレを飲むという静かな時間が過ぎた。

「……」

「……」

「「あの！」」

沈黙に耐えきれなくなった2人は同時に声を出す。

「なに？」

「光太さんからどうぞ」

「…その…謝りに…来た。あのときはホントごめん！　申し訳ない！！」

光太はゴツンとテーブルに額を打ち付けた。

優雅はカップをソーサーにカチャッと置いた。

「…謝るのは私の方ですよ。あのときは八つ当たりしたようなものなのに…。…先に謝らせるなんて、私って本当に悪い女ですね…」

「そんなことない！　優雅は…」

「違うんです」

優雅はティーオーレを見つめながらポツポツと言った。

「違うんです。その…今日一日ずっと考えてて…光太さんには、ちゃんと私のことを話しておかないと、って…」

光太はうっかりカップを落としそうになった。謝罪だって受け入れてくれるとは思ってなかったのに。

「…話…聞いて下さいますか？」

「……。…もちろんだ」

「…ありがとう、ございます」

ほんのちょっとだけの沈黙がおりた。

「今いる会社に勤める以前は、昨日いらしたお客様の会社に勤めてたんです。でもその時の私は人見知りが激しくて、見た目も悪くて…。気がついたときには社内でいじめにあって、それで社会不安障害…対人恐怖症になってしまったんです」

「……」

「そんな最中（さなか）にリーマンショックで勤務先も大々的なリストラを行って、対人恐怖症で仕事もろくにこなせなかった私は、真っ先にそのやり玉に挙げられました」

「それは…辛かったろうな」

優雅は自虐的に微笑む。

「ふふ。そこで『しょーがねーじゃん』とか言わないところが、優しい光太さんらしいですね」

優雅の立場に立ってみたら、そんなこと言えない…。

「それで退職した後も、色々することもあって。人事部の部屋の前に来たとき、偶然仲良くしてくださった先輩がロッカールームから出てきたんです…」

『…えー？　神野のやつ、まだ会社に来てるの？』

『そーなの。とっくに辞めたと思ってたのに、まだしぶとくいるんだよ？』

『はーぁ…せっかくあいつクビになったのに、また顔合わせたくないな～』

『だよねー』

『じゃあ見つからないうちに、裏口から逃げちゃおっか？』

『そうしよそうしよ』

『あははは…』

「……。……。……。…そうか…。……」

「…腹が立つというより、そこで変な火がついちゃいましてね。会社にとっても社員にとっても、もう手放せない！　って人間になってやろうって」

「……」

「それで見た目を変えて、話し方も変えて、態度も変えて。そしたら本当に友達できたじゃないですか。人間ってチョロいな～と思ってたんですけど、やっぱり人と接するのはどうしても苦手で。それに…」

「…それに？」

「本当は、知っておいて欲しかったのかもしれません。本当の私は気持ち悪くて、ワケわかんなくて、付き合いづらくて…」

「そこまでだ」

光太の制止に優雅は口を閉ざす。

「俺、お前の過去を聞いたからって、お前に対する印象は一切変わってない。そりゃ、お前にとってはとても重くて、辛くて、消したい過去だろうとは予想つくけど」

「……！」

「それに、お前は自分を変える努力をして、現に成し遂げて、雑用ばかりとはいえきちんと仕事こなしてるじゃないか。それは立派なことだと思うし、俺はそんなお前が…」

ここまで一息に言い切って、光太はハッと言葉を切った。

（…お、おおお俺いま何言おうとしてた…！？）

「…私が、なんですか？」

優雅が邪気なく微笑む。

「いや、その…な、なんでもないっ！！」

「…そうですか…」

「つーか、ホントに悪かったよ。気になるならお前に直接訊けば良かったんだ。ごめんな」

「私の方こそ…あんなことで子供みたいに不貞腐れて…すみませんでした」

そして優雅はまたニカッと笑う。

「明日には、また元気に出社します」

「よし、頼むぞ。優雅ひとりいないだけで、今日一日すげー大変だったんだからな」

「大袈裟ですよ」

それからしばらくは優雅の部屋で話した。

優雅は自虐的に“気持ち悪い部屋”などと言っていたが、不思議と光太には優雅がそこにいることへの居心地の良さを感じていた。

…もう誤魔化せない。

自分は優雅のことが…。

新人はハンサムガール（１２）

こうして月日は流れ…。

「ねー見て見て！　あんなところに教会があるぅ！！」

季節は秋を迎え、光太たちは社員旅行に出掛けた。自由行動の時間には、西條部長を除いたいつものメンツで行動していた。

「ねーねー入ってみよ！」

綾香が陽介と優雅を引っ張り、勝手にチャペルの扉を開けてしまう。中にはバージンロードを挟んで長椅子が並んでおり、祭壇の横の壁には簡易なパイプオルガンが置いてあった。

陽介が腕を組んでしみじみ呟く。

「おー、小規模ながらなんか荘厳じゃん」

「荘厳、なんて言葉が自然に出てくるんですか？　意外ですねぇ」

「…俺はそんなアタマ悪そうに見えるのか…？」

横にいる光太と竜哉がプッと吹き出す。まぁ見た目の軽さは頭の軽さと比例しないとは思うが。

先に祭壇へと行ってしまった綾香を、優雅と男子メンツは追いかける。

「パイプオルガンがある。優雅、なんか一曲弾いてみろよ」

「えー？　弾けませんよーぉ」

「だって、ピアノ１０年間もやってたんだろ？　第４話で言ってたじゃん」

「ピアノとパイプオルガンじゃ、勝手が違いますよ」

「そこをなんとか」

光太のみならず、皆の期待に満ちた眼差しを受け、優雅はしばし思案した。

「そうですね…じゃあ綾香さんと光太さん、祭壇の前に横に並んでください」

「へ？　こ、こうか？」

光太と綾香が並んだのを見ると、優雅は鍵盤に指をかける。

が、その“一曲”を聞いた全員が凍りついた。

だって優雅が弾いたのは、タンタカターン♪　なウェディングマーチだったから！

「え！？　お二人ってそんな関係だったんですか！？」

長椅子に座ってた竜哉が腰を浮かせて驚愕の声をあげる。一方で陽介は、ズドーンと傍目でも分かるくらい地盤沈下していた。表情が暗い。

そんな外野の反応を見て、光太はアワアワしながら『違うっ！』と手を振り、綾香は毅然として言い放った。

「えー！　一緒に並ぶなら矢神くんより吉川くんがいい！」

「「「「え？」」」」

その声に陽介の表情がパッと明るくなる。単純な奴だ。

「ほっ、本当ですか綾香さん！」

そしてあっさりフラれた光太は、負けじと口真似しつつ言い放った。思わず、といった感じで。

「なっ…！？　だ、だったら俺だって、隣に並ぶなら綾香さんじゃなくて優雅がいい！」

「「「「え？」」」」

しまった、と思ったときには遅かった。優雅を含む全員の視線が光太に集中している。

「…矢神…それって…」

「ち、違っ…そそそそーゆー意味じゃ…！」

「…そうですよね…」

いつの間にかウェディングマーチを弾く手を止めていた優雅が、どこか寂しそうに微笑(わら)っている。

その表情(かお)を見て光太の心に変な火がついた。

「ちっ、違くはないぞ優雅！！」

「…え？」

「…矢神、どっち？」

「あの…その…い、一緒にバージンロード歩く約束はまだできないけど…」

新婦と一緒にバージンロードを歩くのは、花嫁の父だ。

「いつから光太さんは私のお父さんになったんですか」

「あああ～間違えた！！　えっとだな、つまり……は……、……」

光太の言葉を待つように、それっきり誰も一言も喋らない。

外では小鳥がチュンと啼いて、バサバサっと一斉に飛び立っていった。

突然の秋風が彩(いろ)づく紅葉を揺らして木の葉を散らしていった。
その風に吹き飛ばされたのか、ポリバケツがカポーンとケロリン桶みたいな音をたてた。
やがて、光太がパクパクと口を動かした。
「…矢神…？」
「…〜っ、優雅！　テメェ俺が何を言おうとしてるのか気付いてんだろが！！」
「え？　何をですか？　何も気付いてませんよ？」
しれっとした顔で言い返す優雅。
（わざとだ…絶対！）
しかし恋は盲目、いや愛は盲目というのだから仕方がない。光太はこの小悪魔でハンサムガールな新人に、言うべき言葉を必死に探した。
恥じ入ったように俯きながら。
「優雅」
「はい」
光太は口の中で言葉を反芻すると、ややあって決心したように顔を上げた。

「俺と付き合ってくれ」
「…お手洗いにですか？」
「そう俺この頃トイレが近くて…ってなんでやねーん！！」
びし、と優雅の頭にチョップが入る。
「いたッ！」
「ひ、ひとがマジで告白してるってーのにコイツは…！」
「…マジ、なんですね？」
「…あ」
思わずポロリと出た本音に、優雅は得たりと笑んだ。
そしてしっかり頭を下げる。
「謹んで、承ります」
光太を含む全員がポカンとした。
「ゆ、優雅？　それってあの、ＯＫってこと？」
「信じられませんか？…しょうがないなぁ…」
そしてパイプオルガンの椅子から降り、光太の前に立った。

軽く背伸びをして。

チュッ。

「な…っ！？」

「いただき」

優雅は本当にさりげなく、光太の唇を奪っていった…。

この行為に陽介と綾香は歓声をあげ、竜哉はひとり溜め息をついた。

「先輩方、そういうことは人目の無いところでやって下さい。目に毒です」

竜哉の憮然とした声に、光太たちは皆、幸せそうに笑った。

了

新人はハンサムガール（１２）（後書き）

ご愛読ありがとうございました。

m（＿）m

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4607l/

新人はハンサムガール

2011年6月21日20時31分発行